OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中井竹山の印章
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	懐徳堂センター報. 2007, 2007, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24392
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

懐徳堂センター報２００７　（大阪大学大学院文学研究科・文学部 懐徳堂センター　２００７年２月２８日発行）

中井竹山の印章

湯　浅　邦　弘

はじめに

懐徳堂第四代学主中井竹山は、その卓越した学識と行動力によって、大阪学問所「懐徳堂」の黄金期を築いた。老中首座松平定信との会見、それに基づく経世策『草茅危言』の上呈、徳川家康の一代記『逸史』の執筆と献呈、火災により焼失した懐徳堂学舎の再建、懐徳堂諸規定の改訂・整備、中国古典に対する精力的な研究など、竹山は大きな足跡を残した。

この竹山の世界を、また別の確度から理解するための資料が、懐徳堂文庫に収蔵されている。中井竹山の印章である。『懐徳堂印存』は、中井竹山から中井桐園に至るまでの歴代学者の印譜であるが、懐徳堂文庫には、同時に、二百四十顆もの実物が残されており、竹山の印章がその約半数近くを占めるのである。

先に筆者は、拙稿「懐徳堂の小宇宙―懐徳堂印の研究―」（『中国学の十字路』、研文出版、2006年）において、この懐徳堂印の概要について論じたが、本稿では、その内の中井竹山印に対する筆者の分析結果の詳細を、以下にデータベースとして提示したい。

１．中井竹山印データベース凡例

①懐徳堂文庫に残されている中井竹山の印を対象として、その情報をデータベースとして提示する。

②項目の通し番号は、「昭番」と「大番」とからなる。「昭番」とは、昭和15年（1940）に刊行された『懐徳堂印存』増補改訂版三冊本の中井竹山印について、便宜上、先頭から筆者が割り振った番号である。同様に、「大番」とは、大正元年（1912）刊行の『懐徳堂印存』の通し番号である。このデータベースで、昭和版の通し番号を基礎とするのは、昭和版の方がより完備した印譜だからである。『懐徳堂印存』の詳細については、前記の拙稿を参照。なお、『懐徳堂印存』冒頭に掲載されている「懐徳堂」印は、番外として0番とした。

③データベースの項目は、「釈文」「篆刻者」「材質」「刻状」「形状」「特殊形態」「輪郭」「法量」「印存注記」「大江文城書き入れ」「印面技法」からなる。まず篆刻された文字を「釈文」によって示し、次に、「篆刻者」が分かっているものについては、その人名を記す。「材質」は、『懐徳堂印存』の注記に従う。特に注記のないものは石印である。「刻状」は陰刻（白文）か陽刻（朱文）かを記す。形状は、印面の形を「方形」「長方形」「円形」「楕円形」などに区分して記す。竹山印の中には、天地両面に印を刻むものがあり、これを両

面印という。また、大小二つの印が入れ子になっているものがあり、これを子母印という。そうした場合は、「特殊形態」として特記する。「輪郭」は、印の輪郭の状況を記す。通常は「単郭」、ないものは「無郭」、輪郭が線ではなく図案となっているものは「図案郭」と記す。「法量」は印面の縦×横のサイズをcm単位で記す。「印存注記」とは、『懐徳堂印存』昭和版に附記された注記である。「大江文城書き入れ」とは、重建懐徳堂で講師を務めた大

2．中井竹山印データベース

昭番	大番	釈文	使用者	篆刻者	材質	陰刻・陽刻	形状	特殊形態
0		懐徳堂				陽刻	長方形	
1	1	大阪府學教授	中井竹山	前川虚舟		陽刻	方形	
2	2	懐徳書院教授	中井竹山	前川虚舟		陽刻	方形	
3	19	府學教授	中井竹山	曾之唯		陰刻	方形	
4	—	力學立言	中井竹山	曾之唯		陽刻	楕円形	
5	25	天子知名	中井竹山	前川虚舟	陶印	陽刻		
6	46	懐徳堂長	中井竹山	前川虚舟	銅印	陽刻		
7	7	積善之印	中井竹山	高孺皮芙蓉		陰刻	方形	
8	8	竹山居士	中井竹山	高孺皮芙蓉		陽刻		
9	21	中井積善	中井竹山	高孺皮芙蓉		陰刻	方形	両面印甲
10	22	子慶氏	中井竹山	高孺皮芙蓉		陰刻	方形	両面印乙
11	48	積善之印	中井竹山	高孺皮芙蓉		陰刻		
12	—	子慶	中井竹山	高孺皮芙蓉		陽刻		
13	51	竹山	中井竹山	高孺皮芙蓉		陽刻		
14	31	竹山居士	中井竹山	高孺皮芙蓉		陽刻		両面印甲
15	30	浪華釣客	中井竹山	石田		陽刻		両面印乙
16	16	子慶氏	中井竹山	葛子琴		陽刻		
17	3	臣積善	中井竹山	石樵		陰刻		
18	33	非艸非木九仞一簣	中井竹山	石樵		陽刻		
19	28	常世郷侯	中井竹山	前川虚舟		陽刻		
20	13	竹山	中井竹山	前川虚舟		陽刻		
21	—	積善	中井竹山	源重教		陰刻		
22	32	髯公同物	中井竹山	石田		陽刻	長方形	
23	45	子慶	中井竹山	石田		陽刻	方形	
24	4	子慶	中井竹山	石樵		陰刻		
25	78	號竹山	中井竹山	稚汀		陽刻		
26	15		中井竹山	前川虚舟		陽刻		
27	55		中井竹山	福田軏菴		陽刻		

江文城が昭和版『懐徳堂印存』七冊本（懐徳堂文庫所蔵）に自筆で書き入れた注記であり、主に紐の材質に関わる情報である。「印面技法」は、印文・印面に際だった技法が使われている場合、その旨を注記する。

④印文について特に注釈を必要とする場合は、本表の後に解説を記す。主に印文の出典・由来に関するものなどである。

輪郭	法量(縦横)	印存注記	大江文城書き入れ	印面技法
単郭	5.4×3.0			
単郭	4.8×4.8		石印木方紐、桑木紐	
単郭	3.9×3.9		石印、烏柿紐	
無郭	2.5×2.5		石印、木方漆塗紐	
単郭	3.4×1.6		石印木紐	
単郭	3.1×2.0	存而不用	左顧亀紐	
無郭	2.4×2.4		蝦紐	
無郭	6.1×6.1		石印方木紐	
単郭	6.0×6.0		石印方木紐	
無郭	2.2×2.1		石印	
無郭	2.2×2.1		石印	
無郭	1.3×1.3		石印	
単郭	2.9×2.9		石印	
単郭	1.6×1.6		石印	印文大小法
単郭	2.0×2.2		石印	
単郭	2.1×2.2		石印	
単郭	5.1×5.1		石印方木紐	点画円転、印文大小法。
無郭	2.7×2.7		石印方木紐	左実右虚、印文大小法。
単郭	3.4×3.4		石印方木紐	
単郭	2.8×2.8		石印方木紐塗、(黄梨)	
単郭（厚郭）	2.8×2.8		石印方木紐	周実中虚、点画垂直、印文大小法。
無郭	3.0×3.0		（側款、源重教刻）	
無郭	4.1×2.0		石印木紐	
単郭	2.9×2.9		なし	
無郭	2.6×2.6		なし	
無郭	2.2×2.2		なし	
単郭	5.2×5.2		石印方木紐	印文大小法
単郭	2.0×2.0		なし	印文大小法

昭番	大番	釈文	使用者	篆刻者	材質	陰刻·陽刻	形状
28	66	囂々	中井竹山			陰刻	楕円形
29	75	雪翁	中井竹山	前川虚舟		陽刻	
30	—	積善印信	中井竹山	葛子琴		陰刻	
31	68	竹山居士	中井竹山	木澤福菴		陽刻	
32	17	積善印信	中井竹山	石田		陰刻	
33	18	竹山散人	中井竹山	源重教		陽刻	
34	—	積善之印	中井竹山		陶印	陰刻	稍崩れた方形
35	—	子慶	中井竹山		陶印	陽刻	
36	5	積善之印	中井竹山	石田		陰刻	
37	6	竹山居士	中井竹山	石田		陰刻	
38	29	積善印信	中井竹山	石田		陽刻	
39	58	攝津翁	中井竹山		木印	陰刻	
40	—	積善之印	中井竹山	前川虚舟		陰刻	
41	10	子慶甫	中井竹山	前川虚舟		陽刻	
42	9	竹山居士	中井竹山	前川虚舟		陰刻	
43	82	研田無惡歲酒國有長春	中井竹山	石樵		陽刻	
44	39	竹山	中井竹山	前川虚舟	陶印	陽刻	
45	23	竹山	中井竹山	中西衛	陶印	陽刻	稍崩れた方形
46	44	子慶氏	中井竹山		陶印	陽刻	
47	43	攝翁	中井竹山	前川虚舟	木印	陽刻	
48	56	積善	中井竹山			陰刻	
49	54	積善　子慶	中井竹山	前川虚舟		陽刻	半円形、長方形
50	11	積善印記	中井竹山	前川虚舟		陰刻	
51	41	七十四翁	中井竹山	前川虚舟		陽刻	円形
52	12	竹山	中井竹山	石田		陽刻	方形
53	63	鈐縫	中井竹山	(前川虚舟)		陽刻	円形
54	26	伯慶	中井竹山	曾之唯		陽刻	
55	24	竹山居士	中井竹山	前川虚舟		陽刻	
56	67	間中今古	中井竹山	前川虚舟		陽刻	楕円形
57	64	積善竹山居士	中井竹山	石田		陰刻、陽刻	
58	53	薜荔窩	中井竹山	石田		陽刻	円形
59	38	井渫老人	中井竹山	前川虚舟		陽刻	
60	65	積善之印	中井竹山		竹印	陰刻	
61	70	青山不老	中井竹山	石田	竹印	陰刻	
62	36	薜荔窩	中井竹山	森曾伍		陽刻	長方形

特殊形態	輪郭	法量(縦横)	印存注記	大江文城書き入れ	印面技法
	無郭	1.6×0.9		石印	
	単郭	1.0×1.0		なし	
	無郭	4.1×4.1		石印方木紐	
	単郭	3.8×3.8		石印方木紐朱繋、側款あり	
	無郭	4.5×4.5		紫白纐文石	
	単郭	4.9×4.9		石印方木紐	
	無郭	3.4×3.4		象紐	印文歪斜
	単郭	4.4×4.4		蝦紐	
	単郭	2.9×2.9		石印方木紐	
	無郭	3.2×3.2		石印方木蝦紐	
	単郭	3.5×3.5		石印方木紐	
	無郭	3.0×3.1	子母印大	海棠木印	
	無郭	2.8×2.8	子母印小	海棠木印	
	単郭	3.6×3.6		石印方木紐	印文大小法
	無郭	2.9×2.9		なし	
	単郭	3.0×3.1		石印方木紐	
	単郭	2.1×2.1		なし	
	単郭	2.3×2.4		なし	
	単郭	2.7×2.7	子母印	なし	
	単郭	2.6×2.6	子母印	なし	
	無郭	1.6×1.6		石印方木紐	
	無郭、単郭	1.1×1.8、1.3×1.8	連印	石印木紐	
	無郭	2.4×2.4		黒柿材	
	単郭	直径2.1		石印	
	単郭	2.4×2.4		なし	
	単郭	直径1.7		なし	
	単郭	2.2×2.2		石印方木紐	
	単郭	2.1×2.2		石印	
両面印甲	単郭	2.9×1.2		なし	
両面印乙	無郭、単郭	共に1.2×1.2	連印	なし	
	単郭	直径2.3		石印	
	単郭	3.0×3.0		なし	
	無郭	1.8×1.8		獣紐	
	無郭	2.2×1.7		亀紐	
	単郭	2.9×1.2		なし	

昭番	大番	釈文	使用者	篆刻者	材質	陰刻・陽刻	形状
63	60	護封	中井竹山	履軒		陰刻	
64	37	子慶	中井竹山	蕉園		陽刻	
65	57	竹山	中井竹山	蕉園		陰刻	
66	62	護封	中井竹山			陰刻	
67	52	山高水長	中井竹山	章甫		陽刻	短冊形
68	81	海上釣鼇客	中井竹山	石樵		陰刻	
69	49	溱翁	中井竹山	前川虚舟		陰刻	
70	34	善　竹山	中井竹山	蕉園		陰刻、陽刻	円形、長方形
71	42	經術文章	中井竹山			陽刻	短冊形
72	73	天遊	中井竹山			陽刻	
73	59	善	中井竹山		水晶印	陰刻	
74	58	積	中井竹山		水晶印	陽刻	
75	83	考槃	中井竹山			陰刻	
76	72	子慶	中井竹山	石田		陽刻	
77	71	溱翁	中井竹山	前川虚舟		陽刻	円形
78	69	經術文章	中井竹山			陽刻	楕円形
79	35	積善	中井竹山	前川虚舟		陰刻	
80	50	竹山	中井竹山	前川虚舟		陽刻	
81	79	戰兢臨履	中井竹山	石田		陰刻	長方形
82	77	雖無文王猶興	中井竹山	石田		陽刻	楕円形
83	76	非艸非木九仞一簣	中井竹山	前川虚舟		陽刻	
84	80	往者余弗及來者吾不聞	中井竹山	石田		陽刻	長方形
85	27	謝朝華啓夕秀	中井竹山	曾之唯		陽刻	稍丸みを帯びた長方形
86	40	獨寐寤言永矢弗諼	中井竹山			陽刻	
87	20	力學修己立言治人	中井竹山	前川虚舟		陽刻	長方形
88	74	井溱不食爲我心惻	中井竹山	前川虚舟		陽刻	長方形
89	—	扶桑木	中井竹山		扶桑木材	陽刻	長方形
90	61	懐徳堂圖書記	中井竹山			陽刻	長方形
91	14	懐徳書院祭酒	中井竹山	石樵		陰刻	
92	47	成郡中井家藏之記	中井竹山			陽刻	長方形

特殊形態	輪郭	法量(縦横)	印存注記	大江文城書き入れ	印面技法
	無郭	1.6×1.6		なし	
	単郭	2.2×2.2		なし	
	無郭	1.6×1.6		なし	満実
	無郭	1.4×1.3		石印方木紐	
	単郭	2.3×0.9		石印	左右留白
	無郭	3.9×3.9		石印竹瓦紐	
	無郭	1.4×1.5		なし	
	無郭、単郭	直径0.4、0.4×0.6	連印	なし	
	単郭	2.2×0.8		石印木紐	
	単郭	2.5×1.5		石印	
両面印甲	無郭	1.3×1.3		なし	
両面印乙	単郭	1.0×1.0		なし	
	無郭	1.7×1.7		石印	
両面印甲	単郭	1.2×1.2		なし	
両面印乙	単郭	直径1.2		なし	
	単郭	2.5×1.4		石印木紐	
	無郭	0.9×0.9		なし	
	単郭	1.2×1.2		なし	
	無郭	2.8×1.9		石印木紐	
	単郭	4.3×2.4		石印木紐	対角虚実
	単郭	4.5×4.5		方木紐	
	単郭	5.2×2.5		石印木紐	
	単郭	4.2×2.2		石印木紐	
	単郭	2.9×3.2		石印	
	図案郭	3.5×2.7		石印	
	単郭	4.6×2.3		木印、(筑紫扶桑木)	
	無郭	4.6×2.3		(側款)	
	単郭	3.4×2.0		石印木紐	
	単郭(一字ごと有郭)	3.1×3.1		石印木環紐	周虚中実
	単郭	3.0×2.3		石印獣紐	

３．中井竹山印解説

印文について特に注釈を必要とするものを以下に掲げる。04・05などの番号は、前掲のデータベース番号に対応している。また、解説文中の篆刻者情報については、水田紀久『日本篆刻史論考』（日本書誌学大系、1985年）、図録『懐徳堂―近世大阪の学校―』（大阪市立博物館第103回特別展、1986年）などを参照した。

04.「力學立言」は入徳門聯の「力学以修己、立言以治人」（学に力めて以て己を修め、言を立てて以て人を治む）に基づく語。入徳門とは、懐徳堂の正門を入って左側にある庭「已有園」に通ずる門。その両側に掲げられていた竹製の聯が入徳門聯である。このことばは、自己修養とそれに基づく社会貢献の重要性を説いたもので、懐徳堂の基本理念を表している。なお、篆刻者の「曾之唯」（1738～1797）は本姓曽谷、字は応聖、号は学川、また仏斎居士、曼荼羅居、読騒菴。はじめ忠助と称す。京都の人で浪華高麗橋一丁目に居住した。高芙蓉の門人で、「木村蒹葭堂芙蓉の影子」と称せられるほど印風が似ていた。著に『印籍考』。細谷半斎など混沌社の人々と交流したことから、竹山との関係ができたと推測される。

05.「天子知名」とは、「天皇が名前をご存知である」の意。経学を好み詩作に長じた光格天皇（在位1780～1817年）が、ある時、公卿の高辻胤長（たかつじたねなが）に、「朕は嘗て竹山の書はみたれど、履軒のは未だ見しことあらず、履軒はあまり書をかかぬさうぢやノ」（西村天囚『懐徳堂考』）とお話しになり、これを聞きつけた篆刻家の前川虚舟が、儒家の光栄であるとして竹山と履軒とに磁印を贈った。「天子知名」とは、この磁印に刻されていた文字。なお、竹山と履軒の性格の違いからか、竹山はこの印を使用せず大切に保管していた（印譜注記にも「存而不用」とある）のに対して、履軒は使わないのみならず、行方を不明にしてしまったという。なお、篆刻者の「前川虚舟」は、名は利渉、号は虚舟、別号は石皷館。通称一右衛門、清三郎。浪華の人。京都で高芙蓉の門に学び、篆刻を能くし、特に字の彫刻に優れていた。懐徳堂の中井竹山に師事して儒書詩文を学び、木村蒹葭堂に出入りし、岩倉具選（家具）に伝えた。

07.「積善」は竹山の名。竹山の印は一辺6cm（約二寸）を越える雄渾な印が多いが、これは、その中でも最も大きな印の一つ。篆刻者は当時「印聖」と呼ばれた著名な篆刻家「高芙蓉」（1722～1784）である。

08.「居士」は、学問や徳を備えていながら官に仕えない人のこと。

10.「子慶」は竹山の字。

16.「子慶」は竹山の字。混沌社社友の葛子琴（1739～1784）によって作成された印である。石印であるが、上部のみ木製である。

18.「非草非木」とは晋の戴凱之撰『竹譜』の語で、竹を指す。「九仞一簣」とは『尚書』旅獒の語で、原文は「為山九仞、功虧一簣」（山を為る九仞、功を一簣に虧く）。高い山を築くのに、あと一簣（ひともっこ）というところで失敗するの意で、ここでは「山」を表す。すなわち竹山

はこの八文字で「竹山」を表すとした。

19.「常世」は日本語での特別な意味で、永久不変、不老不死、黄泉の国などの意。

22. 美髯公とは三国志の関羽のこと。竹山は、享保十五年（1730）五月十三日に懐徳堂内で生まれた。この誕生日が竹酔日（竹を植えるのに良いとされる日）であり、また三国志の英雄関羽の誕生日と同日であることから、竹山は後に同関子の号を用いた。

28.「囂囂」は、その地位に満足して心静かなさま。『孟子』尽心上篇に「人知之亦囂囂、人不知亦囂囂（人 之を知るも亦た囂囂たれ、人知らざるも亦た囂囂たれ）」とある。

29.「雪翁」は竹山の号。

33.「散人」は俗事に心をとらわれず、民間にいて官職につかない人のこと。詩人や画家などが雅号の下に添えることば。

39.「攝津翁」は竹山の号。「摂津」は旧国名。「摂州」「津の国」とも言う。また、この号は「雪翁」（29参照）に音通する。なお、この39・40の子母印について、大江文城は「海棠木印」と注記する。「海棠」とは「さくら」のこと。竹山は「さくら」に「海棠」の字をあて、履軒は「樺」字をあてるべきだと考えていた。この点については、履軒の『左九羅帖』参照。

41.「甫」は男性の長老。転じて、年長の男性を呼ぶとき、その名につけることば。

43.「研田に悪歳無く、酒国に長春有り」。唐庚『眉山集』次泊頭に「硯田無惡歳、酒國有長春」とあるのに基づく。

47.「攝翁」は竹山の号。「攝津翁」の略称。39参照。

51. 竹山七十四歳の詩作に「七十四翁」とある。『中井竹山詩箋』亥歳元旦の詩「干支感念坐清晨、久在泥塗絳県人、二首六身年已過、又逢二首六身春」に「七十四翁竹山居士書」と記す。

53.「鈐縫」とは、継ぎ目、合わせ目の意。「鈐縫」印は、通常、書物や文書の見開きになっている左右二葉の中央部分や切り離し分に押印される。

54.「伯慶」とは竹山のこと。「伯」は長兄、「慶」は字の子慶を表す。

56.「閑中今古」は朱子のことば。閑静な中で古今に思いを致すこと。『朱子文集』六先生画像賛・康節先生に「閑中今古、酔裏乾坤」とある。

58.「薜荔」は竹山の書斎。「薜荔」はまさきの蔓草。寛政十二年（1800）、中井蕉園が竹山の『中庸定本』を刊行した際、竹山は「大日本津国浪華後学中井竹山子慶書於薜荔窩」と記している。なお、竹山の父の甃庵の書斎の名を「此君窩」と称した。

59.「井渫」は『周易』に基づくことば。『周易』井卦、九三の爻辞に「井渫不食。為我心惻。可用汲。王明、並受其福（井渫えども食われず。我が心の惻みを為す。用て汲むべし。王明らかなれば、並びに其の福を受けん）」、その象伝に「井渫不食、行惻也。求王明、受福也（井渫えども食われずとは、行くもの惻むなり。王の明らかなるを求むるは、福を受うけんとするなり）」とある。

61.「青山不老」は、青々と茂った山のように老いないこと。

62.「薜荔窩」は竹山の書斎。58参照。

63.「護封」は手紙などを封緘すること。「護封」印は、封緘の際に押印された。中井竹山印の中ではめずらしく、篆刻者は、弟の中井履軒である。

67.「山高水長」は、山が高くそびえ、川の流れが長いのに喩えて、人品が高潔で、その遺徳が後世まで伝わること。唐・劉禹錫・望賦に「龍門不見兮、雲霧蒼蒼、喬木何許兮、山高水長」、宋・范仲淹・桐廬郡嚴先生祠堂記に「先生之風，山高水長」とある。

68.「鼇客」とは、豪放不羈な性格、遠大な理想を抱く人の意。唐の李白、王厳光などは「釣鼇客」と自称した。懐徳堂文庫所蔵本では、『奠陰略稿』に「海上釣鼇客」印が押印されている。

69.「渫翁」は竹山の号。

71. 懐徳堂内に掲げられていた堂聯のことば。この聯は、本来、「經術心之準繩、文章道之羽翼（経術は心の準縄、文章は道の羽翼）」という上下二句から成っており、各々一枚の紙に筆写され、左右相対して掲げられていた。現在、懐徳堂文庫に伝わっているのは、向かって左側にあった下聯「文章道之羽翼」のみである。「経術」とは儒学の経典に関する学術、「準繩」とは水平を測るみずもりと直線を決める墨縄。転じて、規則・標準の意。「羽翼」とは、鳥の羽と翼。転じて、鳥の羽のように左右から補佐することである。この聯に対する解説が、竹山の書簡を集成した『竹山先生国字牘』に見える。その中で竹山は、若年の頃から学問修行の主旨は「経術」「文章」の二つにあり、この二つを極めなければ大成とは言えない。「羽翼」は単なる補佐という意味ではなく、まさに鳥を飛ばすことのできる翼の意味であり、飛翔させる道具として喩えたものである。宋代の儒者は、久しく廃絶しかけていた聖学を後世に伝え、正しい道を飛翔させたが、それは文章によってである。その文章が美しかったからこそ、時間・空間を越えて飛翔したのであると解説し、自ら「修身の事業はこの一聯にあり」と、この聯の内容を極めて重視している。竹山が記したこの聯は、文章を軽視する当時の風潮を批判し、「経術」と「文章」とが表裏一体の関係にあることを宣言しているのである。

72.「天遊」は自在に遊ぶ意。『荘子』外物篇に「胞有重閬、心有天遊」とある。

75.「考槃」は「考凡」に同じ。殷代における招神の儀礼。『詩経』国風・衛風・考槃に「考槃在澗、碩人之寛（槃を考して澗に在り、碩人之れ寛（この）まし）」とある。毛伝・集伝とも、この詩を、隠遁の部屋を作り憂いなく生活すること（隠者退隠の詩）と解する。

77.「渫翁」は竹山の号。

78.「經術文章」は堂聯に基づくことば。71参照。

81. 懐徳堂の講堂北側の窓に掛けられていた聯「北牖聯」の上句に基づくことば。北牖聯の原文は「戰々兢々如臨深淵如履薄氷　謝朝華於己披啓夕秀於未振」。前句の十二字は、『詩経』の語。『詩経』小雅・小旻の詩に「戦々兢々として、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し（戰戰兢兢、如臨深淵、如履薄冰）」と見える。また、『論語』泰伯篇には、孔子の弟子の曾子が臨終に際してこの語を引いたとされる。曾子の言は、「曾子疾あり。門弟子を召びて曰く、予が足を啓け、予が手を啓け。詩に云う、戦々兢々として、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如しと。而今よりして後、吾れ免るることを知るかな、小子（曾子有疾。召

門弟子曰、啓予足、啓予手。詩云、戦戦兢兢、如臨深淵、如履薄冰。而今而後、吾知免夫小子)」とあるように、孔子の弟子の中でも最も「孝」を重視した曾子が、親から授かった肉体を保全することに細心の注意を払ってきた（身体を傷つけないことは「孝」の第一歩とされた)、その心境を、まるで底なしの淵に臨むような、薄い氷の張った水の上を歩くような「戦戦兢兢」とした気持ちであると述べ、また、死によってそうした緊張から解放されることを述べたものである。後句については85参照。この両句は、構成上も意味上も、直接には対応しないが、前句が生活態度について、また、後句が文章について、いずれも極めて高い理想を掲げていることが分かる。

82.『孟子』尽心上篇に「孟子曰、待文王而後興者、凡民也。若夫豪傑之士、雖無文王猶興（孟子曰く、文王を待ちて而る後に興る者は、凡民なり。夫の豪傑の士の若きは、文王無しと雖も猶お興る)」とある。西村天囚『懐徳堂考』序文は、この言葉を引用し、大阪学術の興隆を讃えている。

83. 18参照。

84.「往者余弗及來者吾不聞」は『楚辞』に基づくことば。『楚辞』遠遊に「往者余弗及兮、來者吾不聞（往く者は余及ばず、来る者は吾聞かず)」とある。

85. 懐徳堂の講堂北側の窓に掛けられていた聯「北牖聯」の下句に基づくことば。北牖聯の原文は「戦々兢々如臨深淵如履薄氷　謝朝華於已披啓夕秀於未振」。後句十二字は、陸機（字は士衡）の語。『文選』所収の陸機の文章論「文賦」に、「百世の闕文を収め、千載の遺韻を采り、朝華を已に披くに謝り、夕秀を未だ振わざるに啓く（收百世之闕文、采千載之遺韻。謝朝華於已披、啓夕秀於未振)」と見える。これは、陸機があるべき文章について、百世の間見られなかった文を収め、千年の間使われなかった韻を用い、すでに開いてしまった朝の華（使い古された表現）を捨て去り、まだ開いていない夕方の華を咲かせようとする、と述べたものである。上句については81参照。

86.『詩経』に基づくことば。75で解説した『詩経』衛風・考槃のことばに続いて、「獨寐寤言、永矢弗諼（独り寐ね寤に言う、永く矢え諼るることなかれと)」（一人で寝ていても、夢の中で、この憂いのない隠遁生活の楽しみを忘れないと誓う）とある。

87. 入徳門聯に基づくことば。04参照。

88.『周易』井卦九三の象伝のことば。59参照。

89. 88の側款。扶桑木については、中井竹山に、日本の巨木伝承を考察した「扶桑木記」があり、また懐徳堂文庫に三片の扶桑木が伝えられている。

92.「成郡」は当時、懐徳堂のあった大坂「東成郡」を指す。

4．中井竹山印 画像

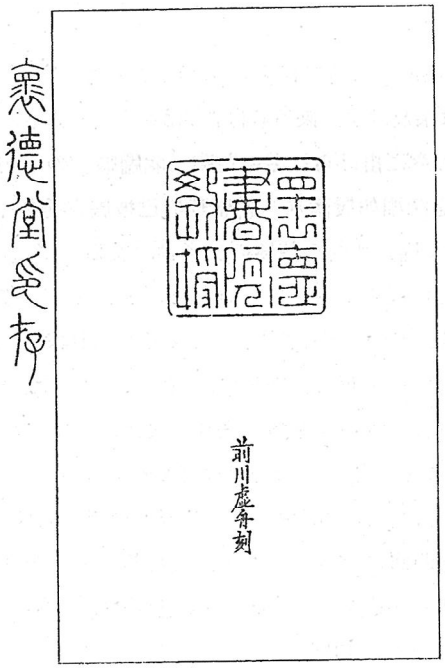
筆者は、中井竹山印の全画像について整理を終えているが、ここでは、紙幅の関係から、その一部を例示するに止める。

例えば、以下の「02-01」、「02-02」、「02-03」の画像は、まず、共通する冒頭の「02」の部

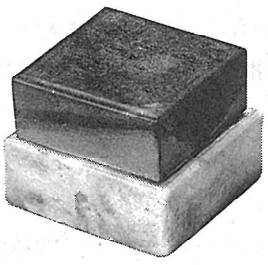
分が前掲データベースの通し番号に対応する印番号である。その枝番号である「-01」は『懐徳堂印存』に掲載された鈐印の画像（懐徳書院教授）、「-02」は印の全体画像（紐を斜め上から撮影した画像）、「-03」は印面の画像（「懐徳書院教授」の鏡文字となっている）である。

また、『懐徳堂印存』の一頁に複数の印面が押印されている場合は、例えば、「03-01（府學教授）、04-01（力學立言）」のように、まず『懐徳堂印存』の該当頁を掲げ、続いて、印ごとに「03-02」（紐）「03-03」（印面）、「04-02」（紐）「04-03」（印面）のように掲げる。

両面印についてもほぼ同様である。例えば、「09-01（中井積善）、10-01（子慶氏）」は両面印であり、『懐徳堂印存』一頁に両印が鈐印されている。両面印であるため、この場合、紐は一顆であり、天地を逆にした紐画像をそれぞれ「09、10-02」「09、10-03」として掲げた後、それぞれの印面写真を「09-04」「10-04」として掲載している。



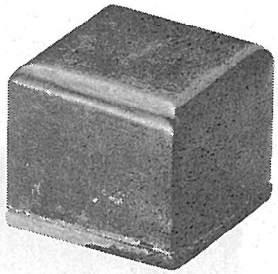
02-01（懐徳書院教授）



02-02

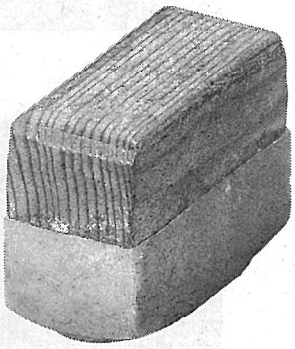
02-03

03-01（府學教授）、04-01（力學立言）



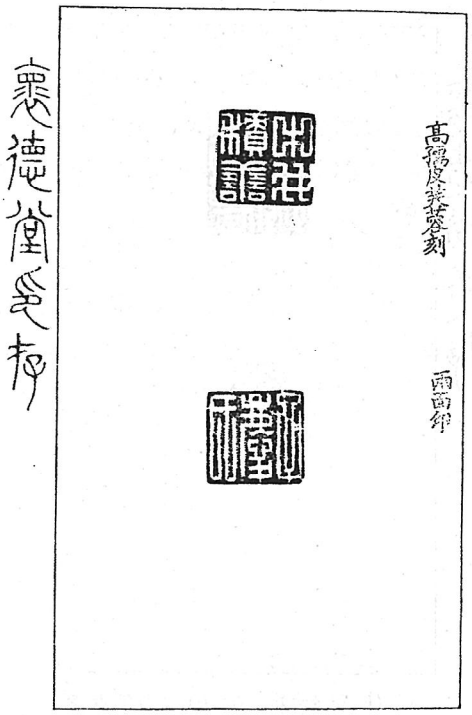
03-02(紐)

03-03(印面)



04-02(紐)

04-03(印面)



09-01（中井積善）、10-01（子慶氏）

09、10-02

09-04

09、10-03

10-04

このようにして、中井竹山印の全画像を整理しているが、その全容の公開は、別の機会に譲ることとしたい。

なお、平成16～17年度文化庁委嘱事業「全国の博物館・美術館等における収蔵品デジタル・アーカイブ化に関する調査・研究事業」（研究課題名「「懐徳堂文庫」貴重資料のデジタル・アーカイブ化に関する調査研究」）による研究成果の一部として、懐徳堂印の中で特色ある印を15顆選び、ＷＥＢ懐徳堂（http://kaitokudo.jp/）で公開している。

（本研究科教授）